



◀第25回▶ インドの映画と推理小説(その2)

有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家  
西ベンガル州は1977年から2011年まで共産党政権  
だった。写真は77年当時の共産党幹部たち(筆者撮影)

### 麻薬中毒ホームズ

コナン・ドイルのシャー  
ロック・ホームズもの第二  
作『四つの署名』(二八九〇)  
の始まりは、ホームズがコ  
カイン注射をうつ描写から  
始まる。そして最後の二行  
は、「僕にはコカインがあ  
るさ」と、その瓶に手をの  
ばすところで終わる。  
当時のインドでは、イギ  
リスが小麦畑をアヘン栽培  
地に切りかえ、大量の餓死

者が出た。  
アヘンの利  
益で、上海を拠  
点とするやく  
ざ青幣と紅幣  
の抗争は、カル  
カッタの中国  
人街にも波及  
した。  
ホームズの  
友人ワトソン  
医師は、アフガ

ン戦争で肩を撃たれ負傷し  
ている(第一作『緋色の研究』  
一八八七)。

ビルマからアフガニスタ  
ンに至る広汎なインドの地  
域で、イギリスは略奪と殺  
戮をつづけた。

インドの移民二世で一九  
七四年生まれのアビール・  
ムカジーの三冊、両親がパ  
キスタン人で一九七三年生

まれのヴァシーム・カーン  
の一冊が早川ミステリーに  
入っている。二人ともロン  
ドン生まれで、ロンドン・  
スクール・オブ・エコノミッ  
クスを卒業した。

### アビール・ムカジー

一九一九年からのカル  
カッタを舞台にした推理小  
説五冊中、田村義進訳で三  
冊が出た。

### 『カルカッタの殺人』

(二〇一九邦訳)

時代設定は一九一九年。  
第一次世界大戦終結翌年の  
事件である。

主人公の警部サム・ウイ  
ンダムは大戦に志願し、フ  
ランス最前線で被弾する。  
生死をさまよう治療に使わ  
れたモルヒネで麻薬中毒に  
なってしまう。従軍中に妻  
はスペイン風邪で死亡した。

スコットランドヤードの  
敏腕刑事だったが、生きる  
ことに絶望。インドで警視  
總監をしている戦場での上  
官だったタガート卿に誘わ  
れ、カルカッタに赴任する。

若いベンガル人の部長刑  
事サレンドラナート・バネ  
ルジーが部下となる。彼は  
カルカッタ名家の出で、ケ  
ンブリッジ出身である。エ  
リートコースを拒否し、帝  
国警察に入る。そのため、  
家族や一門とは断絶状態に  
なっている。

この二人で、以後シリー  
ズ化される。

インド人街で、マコー  
リーベンガル財務局長が惨  
殺される。

反英組織のリーダーが、  
軍情報部H機関に逮捕され  
る。警察の二人が、軍のドー  
ソン大佐に妨害されながら、

犯人を追いつまむというもの。  
真相がゆゆしきものゆえ、  
当局は隠蔽してしまう。  
以下このシリーズは、読  
者に真相は明かされても、  
政治的判断で処理される結  
末ばかりである。

シリーズの常連が、ここ  
で出揃う。ユーモアと同時  
に支配者イギリスと被差別  
者インドの葛藤と緊張が全  
編をおおう。CWA(英国推  
理作家協会)ヒストリカルダ  
ガー賞受賞。

### 『マハラジャの葬列』

(二〇二二邦訳)

一九二〇年、カルカッタ  
で藩王国サンバルプールの  
王太子が暗殺される。それ  
もウィンダムとバネルジー  
が同乗していた車で。バネ  
ルジーはケンブリッジで、  
王太子とは同時期に学んで



カルカッタ(現コルカタ)にて筆者撮影(1977年)

イギリスは、インド支配  
が年々困難になるなか、藩  
王院という合議体に五百以  
上ある藩王国を半強制的に  
参加させようとした。それ  
に反対の王太子が殺された  
のである。

インドは全てイギリスの  
直轄領ではなかった。一定  
の自治権のある半独立国が  
藩王国で、インド全体の面  
積の半分近くを占めていた。

二人は休暇と葬儀参  
加の名目で、サンバル  
プールに行く。  
犯罪の真相はつきと  
めるが、闇の中に封印  
されることになる。  
ラタヤートラの祭り  
をクライマックスに据  
える。巨大なジャガン  
ナート神の山車が何千  
人もの手で引かれる。

イギリス人は、この辺りを  
混同し、かつ訛ってジャ  
ガーノート(Juggernaut)と  
いう語を作ってしまった。  
サンダル、シャンブー、バ  
ンガローなどもヒンズー語  
が英語化したものである。

### 『阿片窟の死』

(二〇二二邦訳)

一九二一年、ガンジー指  
導による不服従運動が拡大、  
反英独立運動が激しさを増  
していった。

イギリスはエドワード皇  
太子を親善訪問させること  
とする。カルカッタの歓迎  
式典での毒ガステロを阻止  
するスケールの大きさと地  
みちな捜査が重構造で描か  
れる。

ドイツは第一次大戦中、  
一九一七年にフランスのイ  
ペールで最初のマスタード  
ガスを使った。土地の名か  
らイペリットガスと呼ばれ  
た。

イギリスも同年、毒ガス  
の研究を始める。これが本  
格化するの三〇年代には  
いつてからで、グルカ兵や  
パンジャブ兵を生体実験に  
使った。のちにイギリス兵  
もオーストラリア兵も犠牲  
者となっている。したがっ  
て、この事件の真相は極秘  
裏に処理される。

もうひとつ、この作品の

面白いところは、ガンジー  
派の幹部C・R・ダースと  
妻のバサンディ・デヴィ、  
スバス・チャンドラ・ポー  
ス(現在、コルカタ空港の名前  
になっている)など、実在の  
人物が大きな役割を果たす  
点である。

### ヴァシーム・カーン

### 『帝国の亡霊、そして殺人』

(二〇二二邦訳)

主人公のペルシス・ワ  
ディアはパールシーでイン  
ド初の女性警部。ボンベイ  
には、パールシーと呼ばれ  
るペルシヤ人が八万人ほど  
いる。十世紀中頃、イラン  
東部から移住してきたゾロ  
アスター教徒(拜火教)で、  
今も鳥葬をする。タタ財閥  
の創始者ジャムシェドジ・  
タタ、指揮者のズービン・  
メーター、クイーンのフレ

デイ・マキユリーなども  
パールシーである。ペルシ  
スという名は「ペルシヤか  
ら」という意味。

インドとパキスタンは一  
九四七年分離独立、インド  
は五〇年一月、共和国とし  
て正式に独立した。この国  
境の線引きをわずかひと月  
でやったのは、インドに  
行ったこともない一介の公  
務員シリル・ラドクリフ  
だった。二分割されたパン  
ジャブは特に悲惨で、二百  
万人以上の死者を出し、略  
奪、殺人などの犯罪が多発  
した。イギリス外交官の殺  
人事件は、この状況下で起  
きる。これもシリーズ化さ  
れる、CWAヒストリカルダ  
ガー賞を受賞した。本格推  
理ものの傑作である。同じ  
く田村義進訳。